



ラッキーナスビ2.5



気品ある姿の探究が始まる



▲中央に設けられた発言席で発言する生徒

気品を体現するために

全校生徒で深めた議論

『我等の目標』の実現へ

今年度の生徒総会で議論したテーマは「附中生にとつての気品とは」である。『我等の目標』にうたわれている「気品」。いつも耳にする言葉でありながら、「気品とは何か」について考え始めると、なかなか答えの出ないものでもある。そんな「難問」に正面から立ち向かった。

3年生の意見表明をきっかけに様々な意見が出され、議論は次第に深まっていた。

気品はルール化すべきか

生徒総会での議論、その柱となったのは、「気品はルール化すべきか」という論点であった。「ルール化すべきだ」と主張する生徒たちの根拠として、次のようなものが挙げられた。

基本となることを考える出発点をみんなに提供することができる。／気品の基準が定まり気品の統一がなされる。／基本形ができ、認め合えるようになる。

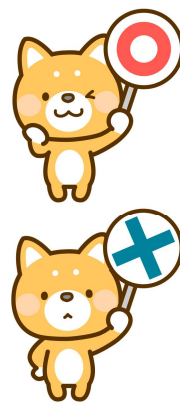
一方、「ルール化すべきではない」と主張する生徒たちの根拠として、次のようなものが挙げられた。

ルールにとらわれて、自発的に保とうという意識が薄くなるのではないか。／ルールしか守らなくなり、そこからの発展性が生まれにくい。／決まりがあるからやらされているという感覚になる。

ここで、議長団が全校生徒にこう問いかけた。

気品をルール化することについて、その良さを活かしつつ、問題点を克服するようなアイデアはありませんか？

生徒たちは、気品をルール化することの「良さ」と「課題」をかけあわせたアイデアを様々に提案し、生徒総会を状況のうちに終えることができた。



他者の視点から

自分を見つめよう

「あの人の、あのふるまいは気品があるなあ。」と感じることはないだろうか。身なりをしっかりと整えていたり、「どうぞ」と先にゆずったり、自分が活動した場所をキレイにして立ち去ったり…。

私たちが「気品」を感じるのは、そのほとんどが「他者のふるまい」を見たときである。このように考えてみると、いくら「自分は気品あるふるまいをしているぞ!」と思っても、それを見た他者が「気品あるふるまいだなあ。」と感じなければ、気品あるふるまいとして認知されないのではないかという仮説に行き着く。

気品が感じられるかどうかを決めるのは「他者」だ。そうだとすれば『いったい自分は他者の目にどう映っているのだろうか?』という視点をもちることができればできるほど、気品あるふるまいを体現していくことができるようになるのではないだろうか。

このことは何も「気品」に限ったことではない。たとえば「人権」だってそうだ。自分の言動がどのような意味をもったかを決めるのは、その言動の対象となった相手（他者）だ。

このように考えてくると、相手（他者）の視点を自分の中に取り込むことを「成長」と呼んでもよさそうである。みんなで成長しよう。

